

人間とは何か

―道德教育の原点を見つめて

副会長 毛内嘉威



人間とは何か、人間の本質とは何か。

これは古代ギリシア以来問いつけられてきたテーマであり、「人間は考える葦である」「理性的存在である」「道具を使う動物である」「社会的動物である」「言語を操る動物である」など、様々な定義が提示されてきました。

一方で、恩師・佐藤三三氏の言葉が思い出されます。「すべては間違っている」。なぜなら、それらは人間が生まれながらに自然に備えているものではなく、放っておいて得られるものでもないからです。さらに個人差も大きいのです。

実際、インドで発見された、狼に育てられた子どもや、フランスで森に捨てられ独りで生きてきた「アヴェロンの野生児」は、理性も言葉も社会性も持ちませんでした。これらの事例は、人間は遺伝的に人間に生まれるだけでは人間になれず、特に幼少期に人間社会の中で育つこと

が不可欠であることを示しています。

人間になるためのプログラムは遺伝子に組み込まれているのではなく、私たちの外に存在します。すでに「人間になり続けている」親や祖父母、周囲の大人や友人、教師、本や教科書、さらにはメディアやSNSまでもがその源です。

私たちは、他者の言葉や理性、社会性を見聞きし、学び、教えられることで、自らの中に取り込み「人間」として形成されていきます。赤ん坊が歩けるようになるのも、ただ自然にではなく、歩く人を見て模倣し、周囲の働きかけによって初めて可能になるのです。ここに教育、そして道德教育の必然性があります。

人間は生まれてすぐに人間であるのではなく、生まれてから人間になる存在です。一生をかけて人間になり続けようとしながら、しかし十分に獲得できないこともあります。なぜなら、学びの相手もまた不完全な人間だからです。親も同じであり、子が生まれたからといって自動的に父や母になれるわけではありませ

ん。苦難と反省を繰り返しながら、よりよい人間を希求していくのです。

では、人間の本質とは何か。佐藤三三氏は「人間とは、自分を自分の手で創り出す存在である」と述べられました。そのために必要なのが「自己を超える知性」です。自己を見つめ、進むべき方向を示し続けてくれる知性――すなわち道德性を磨き続けることこそ、人間の本質だといえるでしょう。

道德とは、一生をかけて問い続ける課題です。道德教育は、道德科を要とする全教育活動を通じて、子どもが「よりよく生きるとは何か」を自ら考え続ける姿勢を育てる営みでもあります。そして日本道德教育学会は、その理論と実践を研究し、普及させる場があります。

人間は生まれながらに完成された存在ではなく、一生をかけて「人間になり続ける」存在です。だからこそ、教育と道德教育の意義は尽きることがありません。私たち教育者、研究者もまた不完全であり、日々の実践・研究と反省を通して、自らを磨き、共に成長していく存在です。

日本道德教育学会は、その歩みを支える学問的基盤と実践の知恵を集める場です。今後とも、会員の皆さまお一人おひとりの探究と実践の交流を通じて、共に「よりよく生きる」道德教育を深め、広げてまいりましょう。

(秋田公立美術大学)

学会ノート

次期学習指導要領の幹が徐々に見えてきており、本学会においても、改訂を見据えた研究や提言などが活発に出されるようになっていく。その多くで意識されているのが、道德科の本質を問い直すという姿勢である。何かが変わろうとしているときは、動く風を感じてわくわくするものである。しかし変化の際に、本来骨組みとして大事にしなければならぬ本質を見落とすと、変わったとたんに狂風吹き荒れ、全てが吹き飛ばされてしまうかもしれない。中教審教育課程企画特別部会の審議では次期学習指導要領における教育課程を象徴する一つとして、「less is more」の考え方が出された。中核的な概念を掘り下げて質的に深く学ぶ(永続的理解)ことで、量的にも多くを学べる学び方を指すものだ。本学会においても、内容項目の数が度々話題に挙げられている。道德科における「less is more」とは何だろうか。道德科の学びの中核的な概念とは何か、そもそも道德科では他教科等と同様の考え方で「中核」を置くことが可能なのだろうか。第106回大会でも様々な議論を通して道德科の本質も考えていけることを楽しみにしている。学会での議論によって、新学習指導要領を爽風として現場に吹かせたい。

(尾崎 正美)

文科科学省における道德教育の新しい動き

令和七年七月二五日、国立教育政策研究所のホームページに「令和四年度小学校学習指導要領実施状況調査」の調査結果を掲載しました。

■調査の趣旨

小学校学習指導要領の次期改訂に資するため、今次改訂の改善事項を中心に、各教科等の目標や内容に照らした児童の学習の実現状況について調査研究を行い、検討の基礎となる客観的データ等を得るとともに、教育課程の基準に係る課題の有無及びその内容等を検証・総括する。

■調査の内容

前述の趣旨を踏まえ、各教科において次の①から③の視点に基づいた内容のうち、ペーパーテストで調査を行うことが適切なものについてペーパーテスト調査を実施するとともに、一部の教科において実技調査を実施した。

- ① 今回の改訂の基本方針に関する事項の実現状況、課題等
- ② 各教科等の主な改善事項（今回の改訂で新設された事項、学年及び学校種を超えて移行した事項）の実現状況、課題等
- ③ 従来、課題とされている事項の実現状況、課題等

あわせて、児童の学習に対する意識や教師の指導の実際等について明らかにするため、児童及び教師を対象とし

た質問調査（児童質問紙調査、教師オンライン質問調査、学校オンライン質問調査）を実施した。

国立教育政策研究所のホームページには、これらの「調査の趣旨」や「調査の内容」などの「結果を見るに当たって」のほか、「結果のポイント」「結果の概要」「教科等別分析と改善点」を掲載しています。

その中の「教科等別分析と改善点」には、道德科における「一、今回の調査結果の特色」として「(一) 質問調査の結果のポイント」「(二) 質問紙調査の結果の概要」と「二、今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点」を掲載しています。

この「二、今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点」では、次の四つの項目に分けて指導上の改善点を示しています。

一点目は「道德科の目標及び内容に関すること」、二点目は「道德科の指導計画の充実に関すること」、三点目は「道德科の指導の充実に関すること」、四点目は「道德科の指導と評価の一体化に関すること」です。

ぜひ、国立教育政策研究所のホームページを御確認いただき、今後の道德教育、その要である道德科のより一層の推進・充実に向けて活用していただけると幸いです。

（教科調査官 堀田 竜次）

評議員会の様子

本部からのお知らせ

二〇二五年七月一三日（日）に第一回評議員会が開催されました。新たに委嘱された二六名の評議員によるはじめての評議員会でした。なお、評議員会は会則第十五条第三項で会長、副会長、評議員、事務局長、常設委員会の長で構成されることとなっていますが、会長代行、監事も同席することが慣例となっており、計三八名で構成される会議体です。

貝塚茂樹会長から開会の挨拶と本日の進行についての説明があった後、会長から評議員会と新設された地方支部連絡協議会の関係を今後整理していくこと、すなわち、これまで評議員会は「支部長及び地域の責任者」（会則第十五条第二項）を充てることになっていたため、地方支部活動についての意見交換を主としてきたが、それらについては今後地方支部連絡協議会に委ね、評議員会は学会運営についての意見交換の場としたいという説明が行われました。

また、それに関連して、地方支部連絡協議会の幹事である西野真由美副会長から二〇二五年九月二一日に第一回の地方支部連絡協議会を開催し、地方支部活動についての意見交換などを行うことが説明されました。

その後、各支部から今年度の計画に

ついでに報告が行われた後に、学会運営や支部活動について意見交換が行われました。

学会運営に関して、次世代育成型研究プロジェクトが実施されたことで研究活動が活性化したが、さらに進めるために共同研究に着手してはどうか、大会運営に関して、自由研究発表では質疑の時間が十分にとれないので、ポスター発表を検討してはどうか、大会運営を効率化して大会を引き受けやすい環境を作った方がいいのではないかと、自由研究発表のなかには研究倫理的に問題があるケースもあるので、研究倫理を周知する必要があるのではないか、といった意見が出されました。

また、支部活動について、一部の支部では、支部会員が減少し支部活動を維持できない、学会会員ではない支部会員を抱えている、支部の活動には参加しても学会に入会はしていただけない、などの課題があることが報告され、支部の適正な規模を検討すべきではないか、どのようにして持続可能な支部活動を行っていくのかを考えるべきではないか、といった意見が出されました。さらに、道德教育がまだ現場レベルでは十分に理解されていないので、草の根レベルの活動を支部活動が担っていくべきではないかといった意見が出されました。

最後に、毛内嘉威副会長より閉会の挨拶が行われ、第二回評議員会を二ヶ月頃に実施することとして閉会しました。

（事務局長 走井 洋一）

2025 (令和 7) 年度春季 (第 105 回・国士舘大学) 大会報告

二〇二五(令和七)年度春季(第一〇五回)大会が、二〇二五年六月二八(土)・二九日(日)の二日間、東京の国士舘大学(世田谷キャンパス)を会場に、「今、道德教育で求められる教育内容とは何か―次期学習指導要領の改訂に向けて―」をテーマに開催されました。

首都圏での開催は、一昨年の武蔵野大学での第一〇〇回大会以来となりましたが、長かったコロナ禍からようやく脱し、次期学習指導要領の改訂が話題となりつつあるこの時期に、このテーマで開催された意義は大変大きかったと思います。全国から近年では最多の三三六名の参加申し込みがあり、二日間を通して多くの方々にご来場頂くことができました。誠にありがとうございました。

これもひとえに、今大会で任期満了により退任された永田繁雄会長をはじめ、理事の皆様、とりわけ毛内嘉威企画委員長、貝塚茂樹事務局長のお力添えのおかげと存じます。重ねて感謝申し上げます。また本大会には、文部科学省、東京都教育委員会、全国小学校道德教育研究会、全国中学校道德教育研究会、全国国民科・社会科教育研究会から後援を頂くとともに、一三の出版社等からも多大な協賛を頂きました。こ

の場をお借りして厚くお礼を申し上げます。以下、本大会の概要を報告させていただきます。

自由研究発表①および②

今大会では、自由研究発表は大会一日目の午前と二日目の午前(自由研究①と②)の二回に分けて行われました。それぞれ八つの分科会があり、合計六三件の自由研究が発表され、活発な議論が交わされておりました。

開会行事・基調講演・ラウンドテーブル

大会一日目の午後には、多目的ホールにて開会行事が行われました。永田繁雄会長の開会挨拶に続き、田原淳子国士舘大学学長、関根明伸大会運営委員長より歓迎の挨拶がありました。

続いて基調講演では、本学会名誉会長の押谷由夫先生より、「世界に発信する道德教育の確立に向けて―『四方よし』の生き方を自分らしく共に追求め、未来への夢と希望を育む―」というテーマでのご講演がありました。未来の道德教育はいかにあるべきか、ご提言に真剣に耳を傾ける多くの皆様の姿がありました。

続いて三四号館の各教室へ会場を移し、ラウンドテーブルが一二の部会に分かれて開催されました。自主的で主体的な企画の下、テーマに関心を寄せる会員相互が発表し合い、自由な形でディスカッションする形式はかなり定着してきたと思います。各部会とも熱のこもった意見交換が数多く見られました。



国士舘大学空手道部学生による団体形の演武

情報交換会

一日目の夜には、新宿副都心の夜景が一望できる三四号館のスカイラウンジを会場に情報交換会が行われました。一五一名の皆様にご参加頂き、日頃の道德教育の実践や研究成果について、大いに交流を深めて頂きました。また、余興では国士舘大学空手道部男子学生による団体形の演武を観覧頂きました。わが国の伝統空手を楽しんで頂きました。

会員総会・シンポジウム・閉会行事

大会二日目には、午前の自由研究発表②に続き、午後には会員総会が開催されました。永田会長の退任に伴って新会長に選出された貝塚茂樹先生をはじめ、新たな理事や評議員等による新体制の役員の皆様、そして決算や今年度の予算が正式に会員の皆様に承認されました。



シンポジウムでの議論の様子

続いて本大会のフィナーレには、「今、道德教育に求められる教育内容とは―次期学習指導要領の改訂に向けて―」をテーマにシンポジウムが開催されました。永田繁雄先生(東京学芸大学)の司会進行で、木原一彰先生(鳥取市立面影小学校)、瀬戸山千穂先生(前橋市立柏川中学校)、高宮正貴先生(大阪体育大学)、西野真由美先生(東京家政大学)の皆様によるご提案の後、フロアからの質問も交え、活発な議論が展開されました。

閉会行事では、次回の第一〇六回大会運営委員長の柳沼良太先生のご挨拶、そして本学会副会長の西野真由美先生より閉会のご挨拶を頂き、全ての大会プログラムが閉じられました。参加された全ての皆様、誠にありがとうございました。

(第一〇五回大会運営委員長 関根明伸)

道德教育研究・実践の探訪 全国大会校編

全国小学校道德教育研究会 全日本中学校道德教育研究会

広島市立石内北小学校の紹介

全小道研会長 瀬下清

一 学校の概要

今年度、第六一回全国小学校道德教育研究大会広島大会の会場は、広島市立石内北小学校です。同校は、児童数九百名を超える規模をもつ、創立九年目の新しい学校です。

石内北は、広島市中心部から北西へ約10kmに位置し、同市の安佐南区と佐伯区にまたがる住宅団地の佐伯区側にあるとても新しい街です。その人口増加に伴い広島市立伴南小学校より分離して、本校が開校しました。

学校教育目標「自ら考え、豊かにかわり合い表現する子どもの育成」を掲げ、特に重点を「子どもを尊い存在と受け止め、一人一人に安心できる居場所のある学級・学校づくり」「学校の中心である授業で子どもとつながり、授業で子どもを育てる」としています。

二 全国大会広島大会に向けた取組

今回の全国大会広島大会では、大会主題を「自己を見つめ、共にによりよく生きる児童を育む道德教育」と設定し、副主題として「互いに違いを尊重し合い、対話を通して考えを深める道德科

の授業づくり」を掲げて、精力的に研究実践を進めています。先日、八月

一八日に、全小道研会長、同顧問代表、同事務局長で石内北小学校を訪問し、ご挨拶とともに会場の視察等をさせていただきます。田中雅美校長先生のリーダーシップの下、全国大会に向けて、着々と準備を進められていることが分かりました。

全国大会当日は、一年生から六年生、特別支援学級の計二一学級の公開授業、七つの授業研究分科会が行われるほか、課題別分科会では六分科会に分かれて、全国の実践者による一二の研究実践が紹介されます。

ぜひ、多くの皆様にご参加いただきますよう、お願いいたします。

岐阜市立長良中学校の紹介

全中道研会長 加藤敏久

一 学校の概要

本年度開催する第五九回全日本中学校道德教育研究大会岐阜大会（十一月二七日～二八日）の会場校は、岐阜市立長良中学校です。同校は、生徒数二九七名、学級数一二、教職員数三五名の規模であり、研究校・研修校・教育実習校の使命を担う学校です。校区は、岐阜市北部に位置し、長良川や金

華山といった景勝地を控えています。

学校の教育目標は、「（本質を）みぬき（可能性に）挑み（生活を）拓く」です。具体的には、「（みぬき）自分や仲間の生活をみつめ、自らの『生きる課題』を明らかにする」「（挑み）確かな実践の過程を生み出し、『生きる課題』をたくましく追求する」「（拓く）実践の過程を経て質の高い力を獲得し、生活をよりよく拓こうとする」としています。この目標を具現するため、**「『生き方』を問い続ける指導」**を中核に据え、全教育活動を通じて、子供たちに**「生活を切り拓く力」**を育むことを大切にしています。特別の教科道德においては、付度なしの本音を伝え合う解放された学級・学校風土づくりを基盤に、自分の心の在り様を見つめ、広い視野から多面的・多角的に考え、人としてよりよく生きたいと願う、考え、議論する指導の充実に努めています。

二 全国大会岐阜大会に向けた取組

「自他ともにによりよい生き方を求め、実践する生徒を育てる道德教育はどうあるべきか」を研究主題とし、丸山早苗校長先生のリーダーシップのもと、全国大会に向けて、全中道研道德教育推進教師育成講座への参加、岐阜県教育委員会、岐阜県小中学校教育研究会道德部会等、関係機関等の連携を密にして、日々、実践を積んでいます。当日は、多くの皆様にご参加いただきますように、どうぞよろしく願っています。

シリーズ日本の道德教育への提言

「子ども版・道德教育全体計画」を作成してはどうか

坂本哲彦

今後一層、「子どもが主体的な学び手になる」こと、すなわち、「自覚的に自分が自分を育てようとする」こと、そして、「それを支援する道德教育を展開する」ことが求められる。

そのためには、まずは、子どもが、自身が当事者に違いない**「学校経営計画（グランドデザイン等）」**や**「目指す子ども像」**、「道德教育の全体計画にある重点目標」などを学ぶ機会を得ることが必要である。「自分たちは、こんな子ども・大人になってほしいという願いのもと、学校生活を充実するのだ」ということを年々何回か、計画的に学ぶことができるようにする。充実の一つの有効な方法は、小学生が読んでも理解できる「子ども版・学校経営計画」「子ども版・道德教育全体計画」を作成し、ホームページ等で公表するのだ。しかも、その作成を管理職や教員ではなく、子どもと一緒に、あるいは、作成の多くを子どもに任せる。子どもの考えや取材した地域、保護者の願いを位置付けることにする。

最も大切なのは、「押しつけられていない」と感じさせることがあってはならないということである。そのために、自分ならではのスペースも確保する。そこには、「自分のなりたいたい自分像」を書くことができるようにする。自由にある。

その上で、道德科の目標や内容、方法等を子どもが理解できるようにする。子ども自身が道德科の目標を知らないで、道德科授業を受けることは不自然である。年度初めにオリエンテーションとして、また、学期ごとに、あるいは、一つの授業の中で、目標や内容に意図的に触れることを支援する。

これらのことは、子どもが、長期的・将来的に「なりた自分」を意識して学校生活、各教科・領域、とりわけ、道德科授業に向き合うことを保証することでもある。学校や地域、保護者の考えを踏まえて、自分が求める姿を繰り返し思考する。したがって、「なりた自分像」はその都度、自分のタイミングで更新される。いつまでも、暫定的な自分像であるが、その時々には、納得して追究する「自分なりのめあて」となる。

突き詰めると、これまで以上に、教員は、一人一人の子どもの「なりた自分像」を支援する存在になる必要がある。あるときは、学級経営で、あるときは、各教科で、道德科授業で、という具合である。前からぐいぐいと引張るのではなく、また、後ろから強く押すのでもなく、一人一人のよさを見つけて励まし、子どもの横を、あるいは、少し後ろを一緒に走る、歩むという感覚であろうか。

なお、道德科授業でも、伴走的な指導は同じである。教材の取り上げる場面や発問等を子どもに任せる指導を研究するのが授業研究の方向となるとよい。(山口大学)

『道德性の発達と道德教育』

コールバーグ

コールバーグは一九五八年にピアジェの認知発達理論に基づいた道德性の発達に関する学位論文を公表し、心理学と哲学の両側面から道德性研究に挑戦した世界的な研究者です。コールバーグが残した功績は、主として「道德（正義）に関する思考には発達段階があり、その発達の筋道には普遍性があることを示した」と、そして「道德性発達の視点から道德教育へとアプローチしたこと」があげられます。この功績は二冊の論集 *Essays on Moral Development: Vol.1: The philosophy of moral development* (1981), *Vol.2: The psychology of moral development* (1984) に収められています。一部は論文や著作は翻訳されています。

今回取り上げる『道德性の発達と道德教育』は全五章から構成されており、そのうち三つはコールバーグが一九八五年に日本で行った講演・講義、そして彼の高弟であるヒギンズのジャスト・コミュニティアプローチに関する講義、さらにコールバーグの一九七一年の論文、*"Stages of moral development as a basis for moral education"* の翻訳が収められています。コールバーグ理論は主として道德性の発達段階を提唱した前期（一九七〇

道德教育を支えてきた名著《11》



年代ごろまで」と、より道德教育にコミットするようになった後期に分けられますが、本書は後期コールバーグに類別される書であると言えます。この理論的背景を考慮しないと、たとえば前期コールバーグはデュルケムの教育論を「文化伝達の道德教育理論」として批判していたのに対して、本書ではデュルケムの教育論に一定依拠した記述も見られるため、読者は混乱するかもしれません。このデュルケムへの歩み寄りが、彼の研究をより一層「教育的」なものにしたといえるでしょう。

では本書でコールバーグが述べていることを少しだけ紹介しましょう。彼は道德教育の目標を次のように記しています。「道德教育の目標は、一人ひとりの子どもの道德判断と道德能力の『自然の』発達を促進し、それによって、子どもが自分自身の道德判断を用いて自分の行動をコントロールできるようにすることであると主張します。道德教育の目標を、決められた規則の教授でなく、発達の促進と規定する場合の魅力は・・・子どもがすでに向かいつつある方向へさらに一歩前進するのを援助することを意味している」。彼にとつての道德教育の目的は、価値を教え込んでいくこと（インドクトリネーション）ではなく、思考する能力を促していくことにあることは終始一貫した主張になっています。そこには子ども（人間）が持っている

力を信じるという姿勢、自律への希望が見出されます。ただし彼は発達段階を上昇させることについて、ある危惧を述べていることには注意すべきです。「第六段階が、低次の段階に比べて、より道德的な思考様式であるという私たちの主張は、個々の人間の道德的な優劣を段階づけることができるのか、そうすべきであるという主張ではないということだ」。発達段階はあくまでその人の状態を知るための目安であり、段階によってその人の優劣をつけることに使われてはならないのです。

コールバーグは道德性を発達させるにあたって、学校コミュニティを形成し、集団の持つ力を積極的に用いていくジャスト・コミュニティアプローチを展開しました。「道德教育のプログラムの方法と目的は、総意によって満足の得られるように効果的に運営される共同体であるといえるかもしれません」と述べているように、彼は民主的なアプローチを取りながらも多数決には消極的で、総意を求める対話を重視しました。「道德教育に対する完全なアプローチとは、正義が生活に密着した問題であるような学校における学生の全面的参加を意味しています」。本書では、これについての詳細な記述がヒギンズによって展開されています。学校を民主的な共同体（正義の共同体）に変えていくことで個々の道德性を促していくというジャスト・コミュニティアプローチは、今もなお教育実践に大きな意味を与えてくれるのではないのでしょうか。(立命館大学 荒木寿友)

私の実践

E A M A による対話を軸にした道德学習

千葉県船橋市立法典西小学校 尾花 桃代

1 対話の意味を考える

教師が道德の授業を考える時、「子供に対話をさせる」という言葉をよく耳にする。その対話は何のようなイメージなのか。そもそも「させる」のか。単にグループで話す時間を意図的にとることを対話と設定していいのだろうか。道德の授業では、教材との対話、自己との対話、他者との対話が行われる。もちろん主語は子供である。子供の学習として、対話の在り方を見直していく。

2 E A M A とは

明治大学の諸富祥彦教授は、新しいエンカウンターとして、グループセラピーから援用したE A M A (Experience-Awareness-Meaning-Approach【体験—アウェアネス—意味生成アプローチ】)の手法を紹介している。特徴としては、主に教材の葛藤場面で、自身自身を一度消して、一人の登場人物の様々な感情を映し出し、みんなでありきる方法をとる。映画「インサイドヘッド」のように、心のパーツを浮き上がらせ、それぞれの感情を映し出し、心のパーツ同士の対話を行うことで、体験的に学ぶことができる。

3 E A M A 道德の実際

今回は、はじめを扱った教材による学習の流れを説明する。導入で、いじ

めのような場面で困ったことがないかと問いかけ、自己との対話を行う。その後、教材と対話しながら、登場人物と自分を重ねていく。登場人物を離れた位置から分析するのではなく、その人になりきろうとすることが大切である。いじめの状況に苦しむ主人公であれば、いじめはどんなことがあってもだめだという「マテマテ君」、自分は関係ないという「ナイナイ君」、いじめを楽しむ「シメシメ君」、これだけののかと違和感を抱く「モヤモヤ君」等、主に4つの心のパーツが浮き上がってくる。まず、それぞれのパーツになりきり、感情を映し出していく。それを基に、登場人物の中で起こっている心のパーツ同士の対話を他者で行っていく。(実態に応じて、対話の人数を設定する。)役割を変えながら、すべてのパーツになりきることで、主人公の葛藤を全身で感じていくのである。その後、役割を解除して自分自身に戻り、自分の心はどのように動いたのかについて、自己との対話を行う時間をとる。さらに、なぜ自分はその言葉で心が動いたのか、自分が大切にしたいものは何か等について、深いところからわき上がってくる自分の感情と向き合いクリアにしていく。そのためには、自己と深く向き合うためのワー

クシートの工夫が必須である。

E A M A を取り入れた授業を行うと、子供自身が自己との対話から他者との対話を通して、さらに自己との対話を深め、自分の生き方と向き合っていく。つまり、教師主導の対話を強制した授業ではなく、心からわいてくる感情や問いを見つめながら対話を深め、それぞれの子供の学びに変わっていくのである。



自己との対話で深く考える子供

4 授業から学習へ

E A M A 道德は、子供の思考を広げ深めるためのアプローチとして大きな可能性があると考える。また、E A M A のような柔軟な指導方法を取り入れて、子供が考える視点をイメージしながら、教師の立ち位置を意識し、学習を支えていきたい。授業を子供の学習にシフトしていくには、問いや学習活動について、子供にとって対話が効果的かというレンズで見つめ直すことが有効である。子供自身が自分の中からわいてくる問いと向き合い、自分の答えを見つけられるようにすることで、よりよい生き方を追究する姿勢が身についていくだろう。そのために、まず教師としての柔軟性について、自分自身に問いたいと思う。

会員の声(私と学会)

インプット&アウトプット

居林 晃一郎

私が日本道德教育学会の仲間に入っていたいたのは、道德が「特別の教科 道德」として教科化を迎えた令和元年度だったと記憶しています。

当時、私は京都市教育委員会の道德・特別活動の担当指導主事として、道德の教科化に関して大変頭を悩ませていました。それまで、現在本学会の会長代行でおられる柴原弘志先生から「日本道德教育学会」の活動についてお聞きしておりましたが、入会するには至らず、京都市の小学校道德教育研究会に参加することで満足していたように思います。一方で教科化の意義や内容について、より多くの情報をピックアップするチャンネルが欲しいとも思っていました。そのようなタイミングで、日本道德教育学会において自由研究発表をする機会を得ることができたのです。

最初は、日本道德教育学会九十四回大会でしたが、その大会で『特別の教科 道德—授業改善のポイント—』を発表しました。発表内容は京都市の道德教育研修会や研究協議会等での講演や指導助言として話している内容でした。参加されていた先生方から、これまでとは異なる視点の意見をたくさんいただき、私の知的好奇心が大いにゆさぶられる、とても素敵な時間をいただきました。

人は一度、知的好奇心がゆさぶられるとさらに活動意欲が高まります。(次の自由研究発表では、もっとオリジナリティのあるものを提案しよう)と思っておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大のため、残念ながら第九十五回大会は中止となりました。紙上ではありましたが、『自己の生き方を考える道德教育の推進』を提案しました。さらに第九十六回大会ではオンラインでの開催でしたが、前回の内容との継続性を図り『自己の生き方を考える道德Ⅱ』として発表することができました。この二回の発表は対面ではなかったため、たくさん意見をいただくことはできませんでしたが、自由研究発表の原稿を作成するプロセスを通して、これまでにインプットしてきた情報や自らの思考を取捨選択・整理することができ、大変価値あるものとなりました。

これまで日本道德教育学会の取組や活動に参加させていただき、感謝の気持ちでいっぱいですが、本学会活動の唯一無比なところは、『インプットだけでなくアウトプットの場合』『高いクオリティ』で設定されている」ということに尽きるのではないかと思います。

現在は、京都市立立川岡小学校の校長として、学校教育目標の具現化に向けて、日々尽力しております。これから、できるだけ本学会の活動に参加させていただきたいと思う今日この頃です。今後ともよろしく願い申し上げます。

(京都市立立川岡小学校)

道德教育研究・実践の探訪

研究室編

東北福祉大学 佐藤 郷美

東北福祉大学は、杜の都仙台に位置し、創立一五〇周年を迎えた今年、硬式野球部が神宮で全国優勝を果たすなど躍動の年となった。私は教育学部初等教育学科に所属しているが、道德(指導法・教材研究)を担当する私のゼミでの活動の一端として、「道德科の授業づくり」と「地域貢献(スルメ天旗風作り)」をご紹介しますと思う。

1 道德科の授業づくり

現在ゼミは2年生から4年生まで計三五人が所属している。必修科目で学んだ基礎を踏まえ、ゼミでは教員として現場に出た際にスムーズに道德科の授業が行えるよう実践的指導力の向上を目指して学びを深めている。主に「模擬授業」の充実であるが、2年生では「四五分の道德科の授業の成立」、3年生では「教育実習での道德科の模擬授業」、4年生ではゼミ論と共に「現場を想定した道德科の模擬授業」を行っている。さらに学年を超えた縦ゼミも適宜実施しながら、「恩送り」と称して、先輩が後輩に模擬授業を示範する時間



道德科の模擬授業

を代々継続して設けている。その成果もあつてか、学生達は模擬授業に臆することなく取り組み、回を重ねるごとに成長が見られるのは嬉しい限りである。上段の写真は夏のオープンキャンパスにて来場者の前で学生が道德科の模擬授業を披露した時のものである。

2 地域貢献(スルメ天旗風作り)

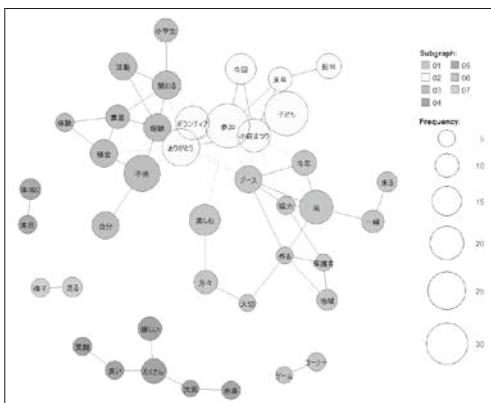
もう一つの取組は、「伝統文化の継承」として仙台風の会の皆様と連携して実施しているスルメ天旗風作りである。多くの学生が竹籤を用いた本格的な風作りは初の経験であるが、「尾の長さや竹籤の張り方を工夫すると風が空に真っ直ぐに揚がることを実感した。自作の風が大空に舞い上がった瞬間は大きな達成感と感動があった。」と感想を述べている。



スルメ天旗風作り

の小学校のフェスティバルに参加している。その際には、小学生向けに簡易版の風作りを指導するほか、ポッチャ体験、防災ワークショップ、エコランタン作り、ゲームコーナーなど、多彩なブースの運営に携わるボランティア活動を行っている。子どもたちと「遊び」を通して触れ合うことは、教員を志す学生にとって非常に貴重な学びの機会となっている。

活動後の感想を共起ネットワークで分析すると、「風作りのコツをどう教えるか」といった教員としての視点の芽生えや、「楽しみ」「地域」「学校」「子ども」「感謝」といったキーワードが浮かび上がる。これらのことから、この活動が地域への貢献であると同時に、学生の人材育成にも大きな役割を果たしていると感じている。今後とも、これからの時代を担う学生たちの成長を見守りつつ、適切な指導と支援に努めていきたい所存である。



共起ネットワークによる感想分析 (2024年度)

●道德教育と特別支援教育(第2回) 共生社会の実現を目指 す道德教育

齋藤 大地

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」(中央教育審議会、2012)の中で、共生社会は次のように説明されています(傍線は筆者)。

・これまで必ずしも十分に社会参加で
きるような環境になかった障害者等が
積極的に参加・貢献していくことがで
きる社会

・誰もが相互に人格と個性を尊重し支
え合い、人々の多様な在り方を相互に
認め合える全員参加型の社会

こうした共生社会を実現する上で、
特別支援教育と道德教育は、目指す方
向を同じくしており、いずれも重要で
す。ただし、現状では、障害の種類や
程度によって学ぶ場が分かれている特
別支援教育は、人々の差別や偏見を生
む危険性も孕んでいます。

それでは、道德教育はどうでしょう
か。教科化の影響を受け、公立の小中
学校の通常の学級では、道德科が着実
に実施されていると思います。しかし、
『誰一人取り残さない道德科』が実現
できているでしょうか。

■多様性の幅と深さが拡大する通常の学級

第1回の原稿を執筆された吉本先生

も引用されていますが、「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」(文部科学省、2022)では、公立の小・中学校の通常の学級には、発達障害の「可能性のある」児童生徒が、8.8%在籍することが明らかとなりました。

道德科では、発達障害のうち、特に自閉スペクトラム症のある児童生徒の困難に焦点があたります。しかし、通常の学級には、境界知能、身体障害、外国籍、性的マイノリティ、ギフテッドなど様々な属性の児童生徒が在籍し、以前に比べ多様性の幅と深さが拡大しています。

そのため、通常の学級においては、授業のユニバーサルデザイン化を図ると同時に、個の特性に応じた支援を講じることが重要になります。他の教科等と同様、全体に対するわかりやすい授業づくりと個別の支援が欠かせませんが、くわえて考察しなければならぬ点があります。

■通常の学級における道德科の懸念

私が抱えている懸念は主に2点です。1点目は、パラリンピアンなどの障害者が登場する読み物教材の扱い方です。こうした教材の多くが、障害のある方が努力をして何かを成し遂げるという展開です。したがって、取り上げ方によっては、児童生徒に障害者に対するステレオタイプ的な見方を助長してしまふ可能性があるので。

障害はその人を構成する1つの特性

に過ぎず、全てではありません。だからこそ、「障害のある〇〇さん」という見方から離れ、一人の人間としての想いや考えに、目を向ける必要があります。

2点目は、道德科の意見の練り上げの過程についてです。道德科では、他者との意見の交流によって、学びが促進されます。積極的に自分の意見を言える子もいれば、そうでない子もいます。今では「C」によって一人一人の意見の可視化が可能ですので、全員に公開するか否かは別として、自分の意見を表出する機会は保障されていると言えます。

ただし、少数の特異な意見が蔑ろにされている状況は起きていないでしょうか。道德科のねらいは道德性の育成ですが、他者と話し合うという活動量から考えれば、児童生徒は話し合いの作法や意義についても、道德科の中で同時に学んでいます。だからこそ、主流派の意見ばかりが取り上げられ、それらの意見があたりか全体の見解であるかのような授業展開では、児童生徒は少数派の意見は無視してもよいのだと学んでしまふ恐れがあります。

以上2点は、あくまで特別支援教育の視点に立ったときに、私の中に立ち上がってきた懸念事項です。長年道德に関わっている先生方にとっては、すでに検討済みの事項であるかもしれません。しかしながら、道德教育を通して共生社会の実現を目指すときには、いまとこれからも引き続いて重要な視点となるはず。

(宇都宮大学)

編集後記

2025年4月に開幕した、いのち輝く未来社会をデザインする大阪・関西万博EXPO2025。会員の皆様の中にも訪れた方は多くいらっしゃると思います。

その万博では8月に、会場までをつなぐ唯一の地下鉄に電気系統のトラブルが発生しました。多くの来場者が帰宅困難な状況となり、万博の閉門時刻も過ぎていたために、会場の最寄りの駅は大混雑となりました。運転再開の見込みはたえず、この場所でのまま一夜を過ごすことになるのかと心配されていたところ、万博会場を再び開門し、ある国のブースでは会場内の規則を破って飲み物を販売したり、音楽を流したりして、帰宅困難者と一晩明かしたというエピソードが紹介されました。

今日の生活の多くはマニュアル化され、AIを活用することが多くなると、こうした判断は生まれにくくなるのではないかと考えられます。やはり、英断ができるのが人間であり、そこには人の温かさを感じるものです。あつてはならない出来事でしたが、このニュースを聞いて、何かほっとした人もたくさんいたのではないのでしょうか。どのような未来社会をデザインしていくのか。万博は終わっても、考え続けていかなければなりません。

(広報委員)